

---

share the fate with ...

春生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

share the fate with . . .

### 【Nコード】

N9911T

### 【作者名】

春生

### 【あらすじ】

太陽の光が全うにささなくなってもう、どれほどの月日が流れただろうか。闇に包まれ、魔物に怯える世界。その中の小さな町での出来事。

以前別の場所で公開していた「GAME」という作品があります。その作品をおいていたHPでのキリバンリクで頂いた、とある王様の過去（子供の頃）のお話です。

本編を知らなくてもこのお話には支障がありませんので、よろしけ

ねば拝読よろしくおねがいします。

## 小さな世界

大雨の打ちつける深夜。全ての国を統べるスカイゲートの城の自室で、王、レオンハルトは暗闇の外を眺めていた。

さながら嵐の様な雨風は強烈な勢いである。城という強固な建物の中、その造りから軋む音などないものの、打ち付ける雨は、透明な薄いガラスを打ち破りそうな音を鳴らし続ける。

王になったその後、夜というものは、唯一の己の時間であるようになった。

今日は、どうやら寝つきが悪いようだ。

脳裏にかすんでやまない過去に、レオンハルトは瞳を伏せて軽く口元を緩めた。

ソファーに座ると、一本のワインを開ける。グラスに注いだワインは滅多にお目にはかかれない、深海を彷彿とさせる青いワイン。

対面した位置の、誰も居ないソファーの前のグラスにもワインを注ぐ。

「・・・大雨の日は、どうにも弱くなって困るよ。ファイナレ」

誰も座っていないソファーに困ったように笑うと、グラスをあわせて快い音を響かせる。

「・・・」

一口喉を潤した後、グラスを置いて、項垂れた額に手を添えた。

G A M E   s i d e   s t a g e

太陽の光など滅多にお目にかかれなくなってから、もう、どれほどの月日が経ったかは、誰も正確に覚えていなかった。

光が差さないだけでなく、あらゆる場所で天災が起り、世の中はあつという間に見るに耐えない状況へと変貌した。

秩序など、もう、一部にしか守られていない世の中になり、国の力

が届いていない場所では耐え難い生活を強いられる。

当然、孤児も溢れ変える世の中で、その子等が生き抜く事など並大抵ではありえない。

一度、親の手が離れると、その後、もう一度、親に会える子供を数えるのがバカらしい世の中だった。

何もかも周りに劣る子供が生き抜くには、自然と方法が限られる。物乞いをするか、廃棄物を漁るか、力あるものにへばりついて生きるか・・・追われる身となる事を承知の上での物取りか・・・

とある町のスラムの端、まだ町とスラムが入り混じっているような場所だ。

それくらいの浅いスラムが、親を亡くした子供が群がり、寝泊りする場所となっていた。

その一角で一人の子供が食事にありついていていた。

果物を頼張る。そのみずみずしい音と、甘い香りに、周囲には年齢かまわず他の子供達が集まってくる。

その視線は物欲しい光を隠さず、恨めしそうに果物を見詰めていた。

「うまそう・・・」

「・・・いいなあ・・・ファイナーレ・・・」

「やらねえからなつ。オレが盗ってきたんだ」

数日振りの食べ物に、滴る唾液でさえもつたいないと言わんばかりにあつという間に果物を食べきる。そのファイナーレの食べ残し、棄てた芯の部分に、周囲で見詰めていた子供が群がり奪い合う。

そんな事が起つてる事は充分承知で果物の芯を投げ捨てたファイナーレは、そちらを見向きもせず本通りに出た。

芯にさえ群がり奪い合う彼らが、ファイナーレに奪いに飛び掛らなかつた理由はただ一つ、彼が他の誰より喧嘩が強かつたからだ。

そんな弱肉強食の世界が、子供達の世界に出来上がっていた。

髪の色は平凡な金髪、瞳もそれに習って、痩せた顔に光を灯している。本当は周りの子らより深く濃い色をしているのだが、薄汚れた

それらには、誰もそんな違いを求めたりしなかった。

平民が住む地域を抜けると、貴族達が住まう領域に出る。綺麗なレングアの敷き詰まった地面に座り、呆然と行き交う人々を眺める。

果物一つなどでは、到底腹は満たされない。が、胃袋に何か収まっただけ、今日は大収穫だった。

そんな事を思いながら、貴族達の高価な着衣や、同年代の子供等の満足げな笑顔をただ眺める。

高位の者達が怯えるほど、スラムに住まうもの全てが、貧困だからと、羨むからと、誰かに殺意を抱くわけではない。

全員が全員、物乞いをするほど飢えているわけでもない。

けれど、道端に座る小汚い子供の一定距離には、誰も近寄らないのが現実だった。

そんな見えない困いをものともせず、ヨタヨタと子供がファイナーレに近付いてきた。

身なりからして、間違いなく上位の者の子供らしい。多少衣服が汚れていたのだが、ファイナーレから見れば大層立派な洋服だった。

ファイナーレが座っていても、子供との目の高さが殆ど変わらない、本当に幼い子供だ。

近寄ってきた子供を一瞥すると、どことなく心もとない瞳がファイナーレを見返してきた。

子供が近付いたのがファイナーレでなく、大人のスラムの住人なら恐ろしい未来を送る事になるだろう行為である。

「何してるの？」

「・・・」

怯えることも軽蔑する事も知らないらしい子供は、いかにも幼い子供らしい疑問を投げかけてきた。

少々、放心状態らしい様子が伺えた。もしかしたら、ついさつき何か不幸に見舞われたのかもしれない。が、そんな事、今の世の中では日常茶飯事でファイナーレが気にすることなどあるわけが無い。当然の如く、無視を決め込む。

無垢な顔で正面から見返してくるこの子供に、少しでも手をかけている様子に見えてしまえば、何処からとも無く現れるかもしれない、この子供の両親にどんなぬれ衣をかぶらされるかなどわかったものではない。

その手口で奴隷や下働きに連行された子供を、フィナーレは何人も見てきた。

訝しげにつやのいいオレンジの髪と瞳を見てみると、子供はフィナーレの横に座りだした。それを見て、フィナーレは眉を寄せて立ち上がった。

「・・・近付くんじゃねえよ。鬱陶しい」

視線だけで子供を見下ろして、言い放った直後だった。

美しいレンガの敷き詰まった高級な住宅街も、薄汚れたスラムの町並みも、魔物の襲撃により、同じ廃墟と化した。

今のこの時代は何処にでも転がっている話だと聞いた。

そんな最悪の状況を、強運を持つ者達だけが、さらに命を繋ぐ糸をつかむ。

## 一つでは変化は起こらない

数日後の夜、シスターが子供の手を引いて部屋までやってきた。

「ファイナーレ、今日からあなたと、このお部屋を一緒に使うお友達よ」

シスターの言葉に視線を下に向ける。同じく視線を自分に向けてきた子供と目が合う。

自分よりまだ小さい子供だった。ファイナーレは訝しげに眉を寄せた。子供はすぐにシスターの服にしがみ付き顔を埋めてしまった。

「ご挨拶はどうしたの？」

すがり付いてくる子供の髪をなでてあやししながら、シスターが声をかけるが、子供は裾から顔を上げようとしめない。

代わりに、シスターがファイナーレに言葉を続けた。

「名前は『レオンハルト』というの。仲良くできるかしら？」

「そんなもん、わかんねーけど。・・・なあ？お前喋れねえの？」

レオンハルトに声を掛けてみるが、裾から顔も上げようとしめない。

その行動は、元々からしてスラムの中で生きていたファイナーレを、なんとも言えずイライラさせる。

「なあ?!」

「・・・!!」

少々大きな声を出してレオンハルトの肩を掴み、シスターから引き剥がす。抵抗など殆ど無いまま、小さな体はファイナーレの正面を向いた。

が、それも束の間、見えた瞳はすぐにシスターの服の裾に隠れてしまった。

「ファイナーレ、乱暴はいけませんよ」

「乱暴つて・・・こんなじゃ、オレじゃなくても仲良くなんて出来ねえだろおよ・・・」

「人見知りが激しいだけで、とても良い子よ。・・・さあ、レオン

ハルト、あなたもちゃんと、ご挨拶なさい？」

「・・・」

シスターに優しく促されて、レオンハルトはようやく正面からフィナーレに顔を向けた。肌の色はフィナーレよりうんと白かった。泣いているためか高潮した頬の色が分かるほどだ。涙を一杯に溜めた瞳と髪の色はまぶしいくらいのおレンジ。通りの端から眺めていた貴族の子供達を思い出させる。そんな印象だった。

「・・・は、じめまして・・・」

消え入りそうなきやくりあげた声で一言言い遂げると、再び涙が頬を伝いだした。

レオンハルトをひとしきり宥<sup>なだ</sup>めて、シスターが部屋を去った。

「ここから向こうがお前の物な。こっちは俺のだから触るんじゃねえぞ」

部屋の空間を説明するフィナーレの動きを、レオンハルトがじっと見詰める。ここに来る前から泣いていたのか、その目の周りは赤くなっていた。

やはり返事はないが説明は聞いていたようなので、フィナーレは自分のベッドに潜りこんだ。

少しすると物を触ったり、机の引き出しを開ける音がし始めた。自分に与えられたものはとりあえず触ってみたくなるものだ。音の距離からしても、自分の領域を侵されていないことが分かるのでフィナーレは無視を決め込んでいた。

やがて、与えられている紙にペンで何か落書きする音が聞こえ始めた。

数分後、なぜか泣き声が聞こえ始めて、フィナーレはついにレオンハルトのほうを向いた。

椅子を机にして、紙を置き、床に座り何かを書いていたようだ。

そして、狭い机と化した椅子の上で、インクボトルが横倒しになっていた。

インクボトルの中身は見事に椅子と紙を真っ黒に染め上げ、床板にまで染み込んでいた。

「・・・なにやってんだよ・・・」

頭を抱えてファイナーレが呻く。その一言と溜息を聞いてレオンハルトが声を上げて泣き出した。

「泣くなよ！うっとうしい！」

一声叫ぶと、レオンハルトの体が大きく竦んで涙がピタリと止まった。

変わりに、小さな体が大きく震えていた。

驚いたのはファイナーレのほうだった。今までいろんな相手を負かしてきたが、こんなに声も出ないほど、心の底から怯えられた経験などなかったからだ。

部屋が数秒、静まりかえった。

無言のままファイナーレが一步を踏み出した。その一步に、レオンハルトがまた大きく竦んだ。

縮こまっているレオンハルトを無視したまま、ファイナーレはすっかりインクを吸い込んでしまった紙をゴミ箱に捨てた。

それから掃除用に配布されているボロ布で床と椅子のインクを拭きはじめた。

レオンハルトは、縮めていた体を少し緩めて、その様子を見詰めた。ボロ布はすぐにインクを吸収してしまい、灰色から黒色になった。

「・・・まあいいだろ、こんなもんで」

所々、インクの黒が残っている椅子と床を眺めて呟くと、布をゴミ箱に捨て、自分の机からインクボトルを取った。

初日から空になってしまったレオンハルトのインクボトルに、自分の分のインクを注ぎいれていく。

「物大事にしないとシスターがうるせえんだよ・・・気をつけるよな・・・部屋よごしたら俺も怒られるし・・・」

液体を移すという慎重な行為の最中のため、少し小さな声でファイナーレが言葉を発した。

やがて、二つのインクボトルは中身を半分ずつにすると、蓋を閉めて机に置かれた。

その頃になると平常を取り戻していたレオンハルトは、フィナーレの服の裾を強く掴んだ。

そのまま、がちり抱き付かれて、フィナーレは二度目の驚きを経験した。

「なんだよっ、おい・・・！」

力任せに振りほどこうとレオンハルトを見たが、その表情があまりに嬉しそうに笑っていたのでそれは断念された。

行き場をなくした両手を持って余しながら、言葉を繋げる。

「そろそろ寝ないと怒られるからっ、寝るぞ」

そっと腕を掴んでレオンハルトを離すと、頷いたのを確認してフィナーレは自分のベッドに潜りこんだ。

レオンハルトの枕もとの明かりが消えるのを見届けてから、自分の傍の明かりを消す。

「・・・」

体温を感じ取るほどに、しっかりと誰かに抱き締められた経験がフィナーレの記憶にはなかった。

だから、ついさっきレオンハルトが自分にしたことには驚いたのだ。

あんなに震え上がらせた後なのに、見せてくれた満面の笑顔。

あんな素直に笑った顔を、誰かから与えられた記憶はなかった。

静かな部屋の中、頭から布団を被り、深く眉を寄せる。

心の奥に埋まり忘れてしまっていた感覚が、ほんの少し疼いたいていた。初めて感じた感覚のせいで、フィナーレはその夜、中々眠りに付く事が出来なかった。

## 一つでは変化は起こらない（後書き）

一話目は急いでUPしたため、ご挨拶が出来なかったような記憶が  
。。。

share the fate with . . . 2話目、拝読  
していただきありがとうございます。

少し長めになってしまいました。長すぎでしょうか。。。

タイトルを迷いました。「変化がもたらすもの」とか「不変」とか  
。。。

似たような言葉ばかり並べて考えましたが、どれもしっくり来なく  
て。

最終的にこのタイトルになりました。

彼らはこの先どうなるのか。

少しでも楽しんでいただけると幸いです。

## ないものを得る日々

孤児院は普通の生活は出来るとはいえ、決して裕福ではない。

悪化する世界情勢の中、小さな孤児院には、僅かなお金と充分とは言いつてもない食料しか回ってこない。

それでも何とか、人数分の食事は準備されて、食堂で全員がありがたく頂く。

食事の前後には必ず感謝の言葉言う。言わない子には、次の食事を抜きという罰則があるほどそれは徹底されていた。

子供数十人が一斉に食事をする食堂は、パンとスープだけの食卓でもいつも賑やかだ。

そんな食堂で、二人ももれずに昼食をとっていた。向かい合わせに座つての、何度目かの食事だった。

「・・・スプーン・・・持ち方違う、よ」

「あ？」

それがレオンハルトから、自発的に話した第一声だった。

フィナーレがパンを片手に嫌々ながらスープをスプーンで掬っている最中だった。

口いっぱいに入れていたパンを大して噛まずに飲み込みながらフィナーレが視線をあげると、自分を見てきた目に少々怯えながらレオンハルトは答えた。

「スプーン・・・持ち方が・・・逆手・・・」

「こんなもん、どうだっていいんだよ」

本当なら皿を口に運んでグイグイと飲み干したいところなのだが、それをするときスターに注意を受けてしまうのだ。

連日注意を受け、ついに根負けしたフィナーレは、最近になってようやくスプーンから飲み始めたところだった。

うるさい小言から解放されたと思った矢先の思わぬところからの言葉に、フィナーレは当然とばかりに悪態をついた。と、レオンハルト

トの瞳に見る見る涙が溜まっていく。

「・・・う・・・」

「おあつ、なんだよっ」

言い返しただけで泣き出したレオンハルトに焦るのも束の間、フィナーレはその後、シスターに散々しかられる事になる。

そんな状態だったが、食事が終われば部屋に帰るのも一緒、眠りに付くのも一緒。朝起きるのも一緒なら、朝食のために食堂に向かうときも一緒。

それ以外でも、レオンハルトはフィナーレによく引っ付いていた。何をする時も、フィナーレを誘って行動を共にしようとした。

何度断つてもずっと誘ってくる。そのうち、断るのすら面倒になったフィナーレは、レオンハルトの誘いにだけは乗るようになった。

何が悲しいのか、悔しいのか、レオンハルトはよく泣いた。

泣けば何とかなるような世界にいなかったフィナーレにとっては、うざったい以外何者でもなかったが、とにかく、気が付けば泣いていた。

寂しくなった、怖い夢を見た。遊んでいて転んだ、負けてしまった。今もまさに、運動場の砂の上で、レオンハルトが盛大に転んで泣き始めた。

「またかよ・・・」

窓から見ていたフィナーレがまるで救護班のように、頃合を見てシスターを呼びにいった。

気が弱いなりに、両成敗を受ける喧嘩もして見せた。

レオンハルトが自分から相手に突っかかっていく事はなかったが、唯一、腰が引けながらも相手に詰め寄る時があるのをフィナーレは気が付いていた。

それは、相手が不正をした時だ。

ルールを破った相手には、レオンハルトが誰よりも率先して立ち向かっていく。

相手が体格のいい年上の少年だったときだけは、先に手を出されたのをきっかけにファイナーレが飛び入り参戦して大事となった。

レオンハルトを強く押しただけの相手に対して、ファイナーレは相手の歯が一本折れるほど殴りかかってしまった。

丁度相手の少年が皆をまとめている中心人物だっただけに、子供達全体の空気が悪くなった。

またいつ喧嘩が起こるんじゃないか、様子を伺う不安の緊張が、子供達の中に立ち込めるようになった。

ファイナーレにとっては、それくらいの空気の悪さはなんともない状況だったのだが、毎夜毎夜、レオンハルトが消灯した部屋の中で考え込んでいただけが気になった。

そんな日が数日続いた後、驚く事をレオンハルトがやってのけた。喧嘩相手と和解の場を作り上げたのだ。

自分から話を持ちかけ、また仲良く遊ぶまで仲直りをして見せた。大喧嘩の後、ぎくしゃくしていた周りの子供たちまで、また一緒に遊ぶようになった。

それは、ファイナーレにとって生まれて初めて見た、力以外での問題の解決方法だった。

レオンハルトはファイナーレにも相手の少年との仲直りを勧めてきたが、ファイナーレにとって、それはありえないことだった。

結局、また窓から彼らを眺める日々が続く。

そんな二人の孤児院での生活が四年過ぎた頃、シスターは神像の前で祈りを捧げるレオンハルトを見かけ、足を止めた。

陽の光が滅多に差さないこの世界で、何の役にも立たないステンドグラスが、本当に稀の陽の光を受け、あざやかな色でその姿を映し出していた。

頭から足先まで、ステンドグラスの配色の光を受け、祈りを捧げる

その姿は、珍しい光の色のせい、高貴な者に見えなくもない。

それでも、あつという間に陽の光は分厚い雲に覆われてしまい、元の暗さが部屋に帰ってきた。それに、我を取り戻しシスターは神像の前まで歩み寄った。誰かが来た気配に、レオンハルトが振り返る。

「おはようございます」

「おはよう、レオンハルト。毎日熱心ね」

「いつかは想いが届いて、魔の者がいなくなる世界になればいいな  
つて……」

「そう。良い心がけね。あなたの想いも必ず聞いてくださっている  
わ」

頭を優しくなでられて、レオンハルトが照れくさそうな笑みを見せた。その窓から賑やかな声が入ってくる。

「レオンハルトー、お前も外で遊ぼうぜ！」

年の頃レオンハルトとさほど変わらない子供が数人、球技用のボールを持って外から声をかけてきていた。

「うんっ、すぐ行……」

笑顔で答えを返しそうになった直後、シスターを仰ぎ見てレオンハルトは問いかける。

「ファイナーレは……？」

「今日も書物室で勉強に励んでいたわ」

「……そっか」

聞き終わると窓に振り返ってレオンハルトは少し大きな声で返事を返した。

「ごめんなさいー、今日はいいや！」

「じゃあ、また今度なっ」

外の子供と手を振りあうと、シスターに一礼して、レオンハルトは廊下を歩き出した。

レオンハルトが部屋を出て行くと入れ替わりに部屋に入った別のシスターが、その姿を見送った後言葉を紡ぐ。

「ここに来た時は、どうなる事かと思っただけ……」

その言葉を聞いて、先ほどまで会話をしていたシスターが緩く微笑む。

「ええ、本当ですこと。しがみ付いて泣いてばかり居たとは思えないわね」

「全く、驚く成長振りだわ」

「変わったといえ、ファイナーレも変わったわねえ」

「ええ。勉強が楽しい様子だわ。さすがに、いきなり暴力で打って出る事もなくなってきたし・・・」

「後は、もう少し礼儀作法を覚えてくれればいいのだけど」

「本当ね」

肩を竦めて微笑みあう声が響くそこには、神像が静かに佇んでいた。

書物室にたどり着いたレオンハルトは、探し人の背中を見つけて話し掛ける。

「ファイナーレ、また勉強？」

「・・・見てわかんねえのか？邪魔すんなよ」

「邪魔はしないって。折角だから僕も何か読もうと思って」

「あつそ」

決して広くない、古めかしい書物独特の香が漂う書物室での、二人並んでのこの時間は、レオンハルトにとって外で遊ぶより何より大切な時間だった。

レオンハルトより三歳年上の彼は、出会ってから間もなく暇さえあれば知識を脳に叩き込むことが日課になっていた。今まで触れることも無かった書物というものが興味を引いたのが一番の原因だが、理由は他にもあった。

ファイナーレの脳裏には、通りから眺めていた貴族の子供の裕福な姿が消えることが無かったのだ。

結論的に何時までも孤児院に居てなるものかと、上を目指す欲に目覚め、それを実行していたのだ。孤児院という居場所で、現状で出来ることといえば勉強しかない。

そんな事はお構い無しにレオンハルトは、大抵横に居座った。特に何を話すわけでもない。ただ、それぞれに興味のある書物に目を通すだけだが、書物室の空気のせいだろうか？レオンハルトは、妙な安心感を貰っていた。

「・・・お前、また世界地図？」

不意に無音の世界に響いた、粗野さの在るファイナーレの声に顔を上げると、少々不思議そうな顔が視界に入った。

出合った頃は怖くて仕方がなかったファイナーレの視線にも、今ではすっかり慣れていた。逆に、その強さに憧れてさえいた。

「うん」

「楽しいか？」

「楽しいよ？知らないことが沢山あるんだ。この大陸の他にも、沢山の大陸があつて、沢山の特色とか・・・色々。あ、あとね、歴史も好きかな」

「ふうん・・・？」

「ファイナーレは・・・？わ、また難しい本・・・数式一杯だあ。これこそ楽しい？」

「楽しいぜー？一見複雑な問題が、公式だけで解けてくんだぜ」  
二人が言わずとも互いに惹かれあっているのは誰が見ても確実だった。お互い正反対にも感じられる性格や個性が、逆に刺激になったのかもしれない。

レオンハルトの臆病さも徐々に緩和されたし、ファイナーレの粗野さも、かなり軽減されていた。

保護施設とも呼べるこの場所で、二人は着実に親友と呼ばれるものに近付きつつあった。

けれど、あくまでそこは保護施設。何時までも居住しているわけにも行かない場所だ。

## ないものを得る日々（後書き）

拝読頂きありがとうございます。

裕福ではないし、思い通りに行かない事だらけだと思っけねど、この頃、彼らは幸せだと思えます。

## 全ては手にはいらぬ

ある日の夕刻、フィナーレがシスターに呼ばれて応接室へと招かれた。そこで、フィナーレの両肩にシスターの手が優しく置かれて、祝いの言葉がかけられていた。

「おめでとう、フィナーレ。上流貴族の方が、あなたを是非家族にと申しでて下さったわ」

「・・・」

「あなたの頭の良さを見込んでだそうよ。日頃の勉学の努力が実を結んだわね」

言われた事を理解しようとしているフィナーレの髪を優しく撫でて、シスターが微笑んだ。

フィナーレがシスターに呼ばれて、いつもと違う空気を感じ取ったレオンハルトは、それを古びたドアの隙間からこっそりと見詰めていた。

そして、その会話を聞いたあとすぐに、そっと部屋へと戻った。

部屋に帰ると、フィナーレはドアを閉めるより前にレオンハルトに言葉をかけた。

「おい、オレ引き取り先が決まったぞ。上流貴族だぜ？してやったりじゃん」

「・・・おめでとう」

「なんだよ？折角盛り上がったのに、なんでしょげてんだよ？」

「だって・・・フィナーレここ、出るんだよね？もう逢えないかも・・・」

「つて、あーあ・・・また泣くつ。お前ね、いい加減止めるよそれ」  
「だって・・・」

「何も一生の別れじゃないだろ？住む場所が変わるだけだって。な？住む家も隣町だし、そう遠くない。街道使えば、歩いてだってい

ける距離だぜ」

「・・・うん・・・」

「んじゃさ、毎週一日でも、会う日決めとこつぜ？ちよつどここと隣の真ん中に、でっかい木があるんだ。そこで逢おう、どうだ？」

「・・・うん！約束だよ」

「おう」

互いに笑顔をかわして、一週間後、あつという間に別れは訪れる。シスターと会話する、見るからに上品な洋服に身を包んだ夫婦の手に、ファイナーレの手が重ねられる。

それを、窓から見詰めていたレオンハルトは、三人の姿が門から消えてもしばらくの間、そこに立ち尽くしていた。

また、逢えるのだから。

一ヶ月ほど経つただろうか。

週一日の間隔で、巨木での密会は続いていた。

春の勢いも最高潮を越え、新緑が夏の深さを覚え始めた頃。

忽然とファイナーレの姿が巨木に見えなくなる。

毎週の約束の密会は交わされなくなり、けれど、諦めきれないレオンハルトは徐々に通う回数を増やしていた。

もしかしたら、他の日にきているかもしれない。そう思うと止められなかった。

週に二回、三回、五回。

ほぼ毎日の様に巨木に向かうレオンハルトを、シスター達は黙して止める事はしなかった。

あれだけ熱心に行っていた神像に祈りを捧げる事も忘れ、まるで置いていかれた子供が彷徨うように巨木に向かう。

そんな日が少し続いた頃、巨木の枝の一本に髪を結う紐を見つけ、レオンハルトはそれを手に取った。

少しばかり、後ろ髪が伸び始めていたフィナーレが愛用していたものに間違いなかった。

「・・・昨日はなかったのに・・・」

呟いて、考えるより早く、ここに来なくなったのは何か理由があるのだと察知したレオンハルトの足は、隣町へと駆け出していた。

フィナーレが引き取られた先の家の名は、もちろん記憶していた。どれも立派な門扉が並ぶ、豪華な家並みの中、明らかに身分違いが見て取れる子供が表札を見て歩く姿は、通りかかる人全てが遠巻きに敬遠した。

目当ての家を、夕暮れ時になってようやく見つけ、グルグルと扉の周囲を歩き回る。屋敷の周りを一周して門扉に戻ったとき、家の中から一人の女性が姿を現した。

レオンハルトと目が合うと、門扉をはさんだ所まで早足で歩み寄ってきたその女性に、レオンハルトは見覚えがあった。

孤児院に、フィナーレを迎えに来た人だ。

門の向こう、目の前に立った女性に、レオンハルトはおずおずと尋ね始める。

「・・・あの、フィナーレは・・・」

「あなたね、いつも誘い出していたのは」

「え？」

上品な身なりに、上品な笑みを浮かべていた顔が、急に苛立ちを見せた顔に豹変した事に驚いたレオンハルトは、思わず言葉を止めて女性を仰ぎ見た。

「いいですこと？もう、あなたとフィナーレは住む場所が違つのです」

「・・・？」

「まあ、頭の悪い子はこれだから。とにかく、もう、フィナーレに近付かないで。わかったら帰りなさい！」

「・・・！」

女性の剣幕に思わずレオンハルトが肩を竦めたそのとき、家のドア

を押し開けて、ファイナーレが姿を見せた。

「・・・レオンツ・・・！」

姿を見つけて、あつという間に駆け寄ると、門の隙間から伸ばしかけた手を女性がつかみとめる。

「ファイナーレ、今はまだお勉強の時間のはずよ？」

「・・・けどっ・・・！」

「こんな子なんて相手にしないで、勉強に励みなさい」

「こんな子って・・・！」

目の前にレオンハルトを置いての暴言に、ファイナーレが言い返そうとしたとき、女性の手がファイナーレの髪を梳く様に優しくなでた。

「貴方は素晴らしい子よ。言ってる事が分かるわね？」

「・・・っ・・・」

戸惑うファイナーレの視線が、義母とレオンハルトの間を彷徨う。

強く、誰にも負けない強い目をしたファイナーレは、そこには居なかった。

同一人物のはずなのに、レオンハルトには、目の前にいるファイナーレが知らない別の人間に見えた。

計り知れない錘おもりのような気持ちだが、心に押し掛かる。

感情が追いついてこない状況で、レオンハルトは放心状態で問いかけた。

「・・・何してるの？」

帰らないの？

この間にあるものは何？

何もないはずなのに。

どうして？

隙間だらけの門扉の向こうにいるのは確かにファイナーレなのに、どうして触れることすら出来ないのか。

目の前の光景が、まるで別世界のような錯覚を覚えたレオンハルトのその言葉に、ファイナーレの記憶の一枚が鮮明に呼び起こされた。

魔物に襲われた町で、最後の一瞬に出合っていた小さな子供。

誰もが距離を置く自分に、隔てなく近寄ってきたあの子供

「・・・お前、あの時のっ・・・!」

「ファイナーレ、いい加減になさい!」

記憶と今のレオンハルトが重なって見えて、再び伸びそうになったファイナーレの手を、義母が強く掴む。そして、ファイナーレの額に優しくキスをして告げた。

「お母様を困らせないで頂戴?」

「・・・」

そこは、スラムに居たファイナーレには窮屈すぎる牢獄のような場所であっても、今までなかった想いを一身に受けることのできる場所でもあった。

優しく微笑んで言葉を投げられると、跳ね付ける事も、その手を振り解くことも出来なくなる。

再びその手が解ける事を、知らぬ間に恐怖していた。

上品な装いの親子が門を隔てて、レオンハルトの前に居た。

背を向けて離れた門に、誰かがしがみ付いた音が響いた気がしたが、レオンハルトは振り返ることはなかった。

帰り道に元々思わしくなかった空から、大粒の雨が降り出した。

強風も交えた雨の中、巨木をしばらく呆然と見上げた後、レオンハルトは部屋の鍵につけていたアクセサリを枝に引っ掛けた。

数時間前、手に入れた髪結い紐を握り締めて、己の家に帰る。

二人部屋の同居人は、まだ未定だった。

全ては手にはいらない（後書き）

拝読ありがとうございます。

なかなか、表現が乏しくてすみません。

少しでも伝わる事を願って、公開いたします。

## それでも朝はやってくる

スカイゲートの城には、相変わらず大粒の雨が降り続けていた。眠れない夜の大雨は、朝を連れてこないのではないかとさえ思わせる。

命日の事を指して、上の日と言うのだと教わった。

上の事を、国によって、地域によって「うえ」とも、「かみ」とも読む。

死んだ後、空の上に住んでいるという意味や、上と神をかけているのだとかいう説もある。

今日はレオンハルトにとっての「上の日」。大切な友人が亡くなった日だ。

この所いんな事がありすぎたとはいえ、一人にしてしまうなんて大誤算だった。

スカイゲートの城、真夜中の廊下を早足で歩きながら、クレージュは少し苦い表情を浮べた。

この城で風竜の騎士の名を持つ彼は、レオンハルトに近い人間の一人だ。

夕刻に外出から帰って旅路の報告をしようと謁見の間に行くと、あははずのレオンハルトの姿が無かった。

いつもここにいる時間だったはずだが、記憶違いをしたかと思秘書に確認すると、意外そうに言葉が帰ってきた。

『クレージュ様、お忘れですか？今日は・・・』

『あ！そうか。じゃ、帰ってきたらオレ達が帰ってること伝えておいて』

客人の前だったために普通に取り繕ったけど、今日だけは一人にすべきじゃなかったのに。

レオンハルトの部屋の前で足を止めて深呼吸をする。  
歩いているうちに少し乱れてしまった、片手に持ったバスケットの  
中を整える。

急いできた証拠がないように、呼吸も整えてから、部屋のドアをノ  
ックする。しばらく待つとドアを開けてレオンハルトが姿を見せた。  
その開いたドアから廊下へと流れた風は、とても悲しく静かだった。  
「クレージュ、こんな時間にどうしたんだ？」

レオンハルトはいつも通りの声色と表情で言葉をかけてくる。  
予想通りの態度だった。

クレージュは満面笑うとバスケットを突き出した。

「お腹空いてさ、調理室からちよつと余りモノ貰って来たんだ。一  
人で食べるのもなんだから、一緒に食べようと思ってさ」  
レオンハルトの視線がバスケットを見る。

丁寧に紙ナプキンをかけられたそれは、どうみてもちよつと立ち寄  
ってもらったような代物ではない。

クレージュは今日は外出していたはずだから、帰ってきた後に急い  
で作らせたか、出て行く前に調理を頼んでおいたか。

どちらにしろ、その気持ちが嬉しくてレオンハルトは肩の力を少し  
抜いた。

クレージュは毎年、親友の命日には自分を一人にしまいと動いてく  
れる。

今年は少し忙しいから来ないだろうと思っていただけに、訪問には  
正直驚いた。

少し笑って、ドアを更にかけて招き入れる。

「どうぞ」

「さんきゅ」

グラスが二つおいてあるテーブルに、手際よくバスケットの中身を  
広げていく。

パンにクラッカー、チーズやチョコレート。野菜スティックや燻製。  
どれも長い夜の共に最適な一品だ。

一通り並べて、最後に自分のグラスを準備したクレージュにワイン瓶が差し出された。

グラスに、青いワインが注がれる。

「王様にいれてもらうなんて、俺役得だな」

「別段、敬つてもいなくせに。よくいうよ」

「敬つてやろうか？俺、そういうの得意だけど」

「遠慮しとくよ、お前の余所行きは外交のときだけで十分お腹一杯だ」

「だよな。俺もだ」

笑ったあと、クレージュはワイングラスを掲げた。

レオンハルトもグラスを寄せて、二つのグラスは小さく音を奏でた。それは、小さな鎮魂の鐘となる。

一般的に、『上の日』には、こうして亡き人の事を語り合う。

そうする事で、姿は無くても存在はあり続ける。

月日が流れ、自然とこの行為を行わなくなった頃、命日は無くなり、命は転生すると言われている。

本来は日中、明るいうちに行われるのだが、生憎と立場上、レオンハルトにはそんな暇はない。

夜に語り合おうなんて、軽く声をかけてくれる相手も、かけられる相手も同じ理由で少ない。

クレージュは、その少ない中の一人だった。

「さあ、飲んで喰おう。ファイナーレはこれが好きだったよな」

クレージュが手の付いていないグラスの横に、クラッカーとチーズを重ねたものを置く。

レオンハルトがそれに言葉を続ける。

「ブルーベリーのソースを忘れると怒られるぞ」

「そうだった。怒ると怖いんだよなあ、睨むし、すぐ臨戦態勢入るし」

あれほど大きかった風雨の音は、部屋で会話が始めると薄らいで、やがて消えていった。

雨が上がると、程なく、新しい朝がやって来る。

## それでも朝はやってくる（後書き）

拝読ありがとうございます。

「share the fate with . . .」は、これで終了となります。

長編と打っておきながら、早く終わってしまうのはこれで二作目・  
・ほんとにすみません。（当初は別のお話を繋げて、もう少し続ける予定でしたので、長編と打っていました）

どんな場所に居る人間も、幼い時があり、成長して今があります。  
そして、これは別の作品で彼自身が言う言葉なのですが、「人は独りでは生きられない」

レオンハルトは、あの後、世界から魔のモノを取り払うため、精霊の力を得る人生を生きます。

それはまた、別のお話・・・です。

最後に、題名の直訳は「運命を共有してください・・・」となります。

それでは、またよろしければ、別の作品でお会いしましょう。

Thank you , All reader . write  
by sunsei

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9911t/>

---

share the fate with ...

2011年10月8日23時03分発行